マニュアルを必要とするのはなぜ？

最近は情報公開社会だけに、時を置かずに行政の各文書の内容まで目に出来る。

「ALS 以外の在宅患者に対するたんの吸引行為に関する医学的・法律学的整理」の情報の中に、在宅で医療的ケアを必要と知る親の次の意見（抜粋）を目にした。

【病院側も「医療行為」でなくなったからこそ退院を認めている。つまり、医療行為が退院時の（注：親への在宅での医療的ケアの）“研修”によって「生活支援行為」になったと理解するのが自然ですし、当然だと思っています。

にもかかわらず、退院後のケアをも医療行為と規定することは、２４時間３６５日医師や看護師などの医療従事者がケアに関われない状況下で、あまりにも当事者の命と退院時の研修をないがしろにするものです。こうした当事者不在の考え方が、十分な研修も行わずに安易に退院させ当事者の命をも危険にさらしている現状を招いていると思っています。】

要は、当事者本位より規則や「専門性、まずありき」の考えへの警鐘とも云える。

この傾向は何も在宅での医療的ケアの問題だけではないと思う。

昔から専門性とは、人間の生活をより豊かにするために派生・発展してきたと思う。それが、いつの間にか「まず専門性ありき」が優先し、「何のための専門性か？」が、どこか後回しのような気がしてならない。

専門性は、マニュアルを必要とする。人工物や人工物対象のシステムでは、例えば原子力発電所、新幹線運行システムのように、確かにマニュアル通り対応・処理しないと、大事故に繋がりかねない。しかし、規則、マニュアル優先思考が、人間の存在、生活を直接対象とする医療、教育、福祉の場合は、マニュアル通りの対応優先では不味い。

マニュアル志向社会の行く末は、マニュアル通りの行動を求める統制社会。例えとしては極論かもしれないが、外国からの訪問者に話す言葉までマニュアル通りの北朝鮮はマニュアル国家とも云える。

「まず専門性ありき」という考えの方々は、そうした考え方の行き着く社会は当事者（我々一人一人の尊厳）は二の次になりがちな社会の姿まで考えてのことなのでしょうかね。

何のためのマニュアルか、専門性かを常に念頭に置きながら思考しつつ専門性を追い求めて行って欲しいものである。

人間の存在、生活を対象とする分野において、色んな制度や専門職種が次々派生していることに、少々心配を抱くこの頃である。

（2004 年 12 月 10 日　記）